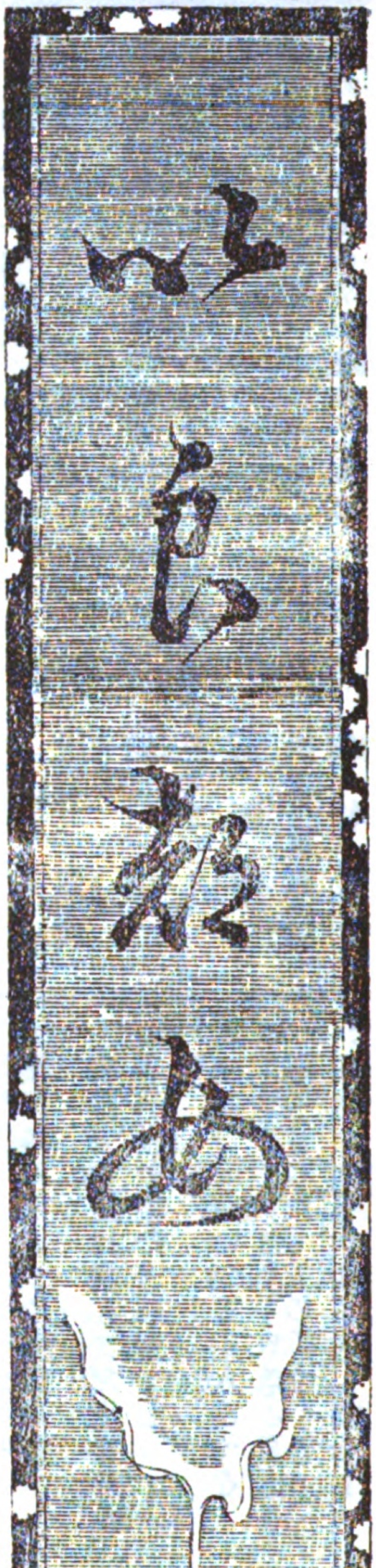
いらつめ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可



いらつめ第五十四號目次（明治卅三年五月廿五日）

●文藝美術……初夏の鐘（俳句、和歌）
根本重藏＝山本嵓＝中山とあ子＝福富翠亭＝鐸洲漁夫＝戀山女史＝山崎よつ子＝旭馨女史＝滑塁＝三坂きぬ＝藤元わさ＝山本鶯醒＝目時絹子＝櫻陰子＝美見仲子＝撫箏女史＝伊藤直太郎＝柳巷＝竹下山人＝菊水＝雪の園主人＝璞溪散史
○英國美譚帝の勳功（浄瑠璃）　アルフレッド麵麭燒の段……中嶋蒿
○東京音樂學校開校式唱歌
○花兄弟二枝梅香（つゞき）…立花家
○日本繪畫の未來……外山正一

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二拾九錢郵税共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵税共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵税共金壹圓〇二錢、四十八部金壹圓郵税共金壹圓二拾四錢〇別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六拾五錢郵税共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵税共金壹圓九拾錢〇並別兩製共前金領収の上で無くては差上げぬ事〇府内に限り無郵税〇毎月二回（五日及十八日）發兌〇金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局とある處に　神田郵便局と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事〇郵券代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割增しなれば妨げ無い事〇見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領収の上差し上ます〇廣告料一行金八錢　割引無し

從第四十八號至第五十七號十部版權所有
明治卅三年五月四日印刷　明治卅三年五月十日出版
發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　東京市本郷區駒込西片町拾番地居住　山本鑑之進
發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

本號には**初夏の鐘**といふ俳句和歌 中島蒿氏の新作**浄瑠璃** 東京**音樂學校**開校式唱歌●立花屋氏の脚本●及次號よは**流行[illegible]飾**[illegible]**[illegible]石白色法**

文藝美術

第二十回懸賞文藝應募得点

題 初夏の鐘

○俳句

聲たえて夏ハきにけり花ハ朝…………根本重嶽(フクシマ)

鐘の音に夏としらるゝ旦かな…………山本嵐(ナゴヤ)

山寺の鐘ゑづかなり夏はじめ…………中山くあ子(ノンマン)

青簾かゝげて聞くや夏のかね…………福富翠亭(トウケイ)

初夏や東寺ハ如何にりねの聲…………鐸洲漁夫(オホサカ)

夢殘るわゝのた寒しかねの聲…………同　上

茂り行く若葉とくゞる鐘の音…………戀山女史(キヤウト)

鐘の音に山べの霞たちわかれ…………同　上

鐘の音のぞつと身にしむ袷衣…………同　上

山かけや若葉の末をわたる鐘…………山崎よつ子(イヘシロ)

鐘の音も夏とハありぬ朝積經…………旭磐女史(ヒロヤヒゴ)

以上十一句無賞

花の香ハ消えて淋しき鐘の音…………滑　翠(トウケイ)

宵の鐘打つと直く打つ明の鐘…………同　上

右評　句の趣向ハいゝですか初夏の意の見えません。

鐘の音や青葉の中よ塔のさき…………三阪絹(ナオヒロ)

鐘の音の下より夏ハ出にけり…………根本重嶽(フクシマ)

春の夢うち破りけり鐘のこゑ…………山本嵐(ナゴヤ)

雨空やとかむを破るゝねの音…………福富翠亭(トウケイ)

數をよむ氣ハ無りけり夏の鐘…………鐸洲漁夫(オホサカ)

花鳥にわかれてかなし鐘の音…………戀山女史(キヤウト)

以上八句いらつめ一部

初夏や夢のなかばに明のかね…………根本重嶽(フクシマ)

右いらつめ二部

咲き殘る花落ぬけり鐘のこゑ…………山本嵐葉(ナゴヤ)

葉隠れの花を落すやあつの鐘…………藤本ゆさ(ヒサカ)

初夏や花のゆつりのわゝの鐘…………中山はな子(ヘシン)

時鳥まつ月のあけに夜半のかね…………戀山女史(キヤウト)

以上四句第三等賞

○和歌

鐘ハ音をきくやあつまの峯の上に
夏きぬけりといてし月かけ…………根木重嶽(フクシマ)

右評　月が主にあつたれが難です。

春霞まだ晴れやらぬ花の日に
夏來にけりとつくる鐘ハ音…………同　上

右評　初夏ハ意がまだ出ません。　是れでハ暮春の意となります。

夏來たる道ハいつこと人とへと
鐘の音わたる天の橋立…………同　上

かねをうち霞の旗とおしたてゝ

天の空より夏は來にけり…………同上

昨日まで待ちわびにたる郭公
　鐘とし聞かはとく歸りこよ…………同上

淵は瀬よりはる浮世のならひとて
　深寺は鐘も夏になくめり…………同上

語りあふあともつきぬに恨めしや
　はやほとかよのあかつきの鐘…………滑翠

青葉ある中よりもるゝ一聲は
　くる夏しらず寺の鐘かな…………山本露醒

花のちる青葉の夏とうつり來て
　ゆふくれつぐる山寺のかね…………目時絹子

茂り行く若葉すゞしきあけぼのゝ
　いともさやけくひゞくかねの音…………櫻陰子

はかなくも殘りし花をちらしけり
　古山寺のいりあひのかね…………想山女史

石評　古びの疵はありました。
以上十一首無賞

そこはたるそらにひとり音するは
　夏きあけりと月や鳴るらん…………根本重濃

いづくにか春を送りて鐘の音の
　今朝はころものねぎかへをせく…………山本露醒

初瀬山みねのさくらもちりはてゝ
　いとゞ物うきいりあひのかね…………目時絹子

おしなべてこぞりしげれる夏山を
　もれくる鐘もさゞしかりけり…………中山はな子

山寺は花はいつしか散りはてゝ
　わか葉にあもるいりあひの鐘…………美見仲子

山寺の鐘の音たかく聞ゆなり
　かすみも春とゝもにきえけん…………撫箏女史

昨日こし花の面影ゆとたえて
　木の間ゆもるゝ山寺のかね…………伊藤直太郎

以上七首いらつめ一部

鐘の音に乘りてや夏は來りけん
　うすゐの關をこえしとおもへば…………根本重濃

郭公夏はよけりとうたふなり
　深寺の鐘の聲にならひて…………同上

散りのこる花やうらこむ山寺の
　入相のかねに夏はきにけり…………柳卷

昨日まで霞を別けし鐘は音も
　今日は青葉の下くゞるかな…………竹下山人

春としたふこゝろの夢も覺にけり
　あかつき告るかねのひゞきに…………目時絹子

昨日まで夢も花見の山里は
　はやはつ夏のあかつきのかね…………中山はな子

山寺の鐘のひゞきもなほはれあり
青葉をぐらき夕ぐれのそら……櫻陰子（ミカハ）

花ちらへにいとひし鐘のひゞきすら
いまはたのしき心地こそすれ……椽箏女史（ギフ）

以上八首いらつめ二部

若葉ふく風波こえて山寺の
鐘の聲こそ夏めきにけれ……根本重藏（フクシマ）

宵の間の夢醒きやらぬあかつきを
まらせ顔なるかねのおとかな……同上

青葉もる夕べの鐘はおとき夕べ
馴れても淋し山陰の庵……菊氷（トウケイ）

咲き残る花落すとや響くらん
青葉のかげの山寺のかね……山本叢園（ナゴヤ）

遲櫻ちり行く枝は梢より
夏つげわたる山寺はかね……雪の園主人（イブリ）

鐘の音に青葉がくれは花ちりて
春の夢路のなごりだになし……同上

郭公はつ音もがなとまつ耳よ
いりあひつぐるかねのこゑのな……目時絹子（イヘテ）

若葉とりしげる梢にふけわたる
月かすみゆく山寺のかね……櫻陰子（ミカハ）

咲きのこる青葉がくれの花一つ
もろくも鐘の音にちりけり……同上

緑そふ樹の間を洩るゝ時の鐘
きのふは春のなごりとぞ聞く……山崎よつ子（イヘシロ）

散残る花に常なきよしつげて
ゆふべさびしき山寺のかね……鶉谿閑史（オホサカ）

昨日まで花とかすみし鐘の音も
うたてや今朝はひとり鳴るなん……根本重藏（フクシマ）

夏きぬと聞てや木々は繁りけん
けふはかすかにもるゝ鐘の音……竹下山人（フクシマ）

以上十一首第二等賞

（未完）

英國美談帝の勳功（浄瑠璃）　中島嵩

アルフレッド煎餅焼の段

實に貴きも賤きも定め無きこそ浮世なれ、哀れなるかな亞爾弗玉、なほ間さへ遠近の、樹々の陰にも目を配り、世を忍ぶ身の獨旅の跡む足元も定かなく、月の光を力草の加留亭の里に迪り付き、伏屋が門に立玉ひ、ちとものたのむと音へば、内には夫と白露にまだ濡れて見ぬ薔薇の花の蕾だちより香り初む年も二八の阿娜娘、しづしづ立出戸尻よ身を寄、「何誰様かは存じませねど、まだ親達も歸りませねば、後程御出遊せ、と愛想

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は更になかりけり。亞爾弗王は當歎の、風情を見せとなれ〳〵しく、え、私は蘇格蘭に久しう暮せし者なれど、牧牛の仕事に雇れたく、遙々是迄參りしが、不馴れ道に日を暮し、御尊中すも失禮なれど、此傍に知己はなし、夜に入りて難澁千極。御情に戶を明け下さりませ共うちには殿方か御爺あされましやうときも事なげに宣へば、さすがおぜ子は娘氣のそんなら明て進ぜやうと立て表の戶の透間洩れ入る月に何氣なくそつと覗て御顏を見上參らせ胸騒ぎ、今更何と氣はそゞろ、若やそれかと立戾り、一間に掛し繪姿に見較る程生寫し。偖はさうかと思ふ程耻しいやら嬉しいやらなしもわなく〳〵震へつゝ輕弱き手先に戶を開き、まあ〳〵あれへと案內に、亞爾弗王は塵打拂ひ次の一間へ入にけり。夜も早八時に近づく頃、立歸る主の妻、年は寄ても頑丈作。戶を押開けば娘は花江、母樣御歸りなされましたか。先刻蘇格蘭の人なりとて、若き御方が只一人お出ありて何れもは歸らるゝまで休ませ呉れよと折入つての御賴ゆゑ是非なく一間へ通しましたと皆まで聞かず母親は一間を目やり目に角立、やゝ何者なるぞ不禮千万。侮り過たる憎き振舞。殊に此際此土も丁抹方の領地となり、草を分ても落人搜し。若や其方も其落人にてもあらざるか。いでやわらため呉んづと情け用捨もあらく〳〵しく、間の扉を蹴飛しつ、入らんとすれば亞爾弗王、威儀を改め內儀に向ひ、先刻娘御より申上し通り牧牛の仕事を望たさに遙々出ましたが今夜の始末。意外の段に

眞平御免し下されかし、身を謙り述ければ、流石邪見の耳にも聞分、さう言ふことは爪はづれのまんざら惡了簡の人でも無さゝうな、さう詫られては是非もなし。不禮の段は免して遣ましよ。去ながら今宵は宿はなりませぬ。何れへなりと出て行かしやれ。さなく〳〵早うとせき立られ何んといらへも言葉さへ絕えてしはく立上りつゝ名殘の惜き、片思ひの花も香もある娘の花江、塞る胸も此場の不首尾に更何んと留やうも、執成やうも泣思ひ。氣ぜられましと顏背け、忍ぶ心ぞせつなけれ。折から表に咳ばらひ、立歸るは是れ左內、花江はそれと出迎へ、父樣御歸りなされましたか　挨拶すゝ間も沿付ぬ素振を尻目にかけ左內亞爾弗王を顏打守り、あれも御言ず居たりしが、忽ち面色和げく、こりや女房や娘や扣へられよ。これ客人吾等は此家の主左內と申者、御身は何處の御方なるや。は、私は蘇格蘭に暮す賤しきもの。名は節藏と申しまして不束なる性質、何卒御身に從ふて、牧牛の仕事を覺えたさ。心一途に禮儀を亂し、御內儀の御怒り今宵の宿も覺束なく、迷惑至極。御情あらば御引立下されたしと禮儀正しく願ふにぞ左內は立て一間に向、掛置給ふ姿繪眺め、ためつすがめつ見比較べつ、獨り頷き立ち戾り。これ客人委細承知致した。御心置なくお泊りあれ。やあよ女房、精き事も後と語され。客人もひもじかろ。夕食れ用意して、一間へ案內なされよ。我等も早く休んで言捨寢所へ入りけり。跡にうつとり此娘、まだ解かねる主の胸は親子は喧る兩人は部

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

屋も勝手へ別かれ行く。殘ンの燈火影暗く、隙間洩る風の音。玉の盞を茅屋に換へ、一夜の旅枕、誰れ憐まぬ大君の忍ばせらるゝ寬仁大度。内には焚火して自ら外に烟の顯れけり。花江、食事に氣を配り、肉叉庖丁取揃へ、食卓に押並べ、御粗末なれど召ませせ、案内に此方も立寄て、食事する間に娘の素振、戀に耻らふ色も香もこぼるゝ、花の顏せも所詮空しき佗情け。不便の者やと亞爾弗土保ち兼たる御淚、瞬繁き御風情。亞爾弗土は娘に向ひ、私も今宵は勞ました。何卒臥らせ給はれと有ければ、てつと氣の付花江はもぢ〳〵、ほんにわたしとしたことが何んの事やらうつかりし、た、耻かしやと云ふ、はに、いざ此方へと先へ立、寢所へ作ひ入る跡を目送る君も夫ぞとは悟りしぞあぞの挽ひべき。氣は强弓は張强く、兼て携ふ手箱より取出す尖箭弓弦を用意の杖に張掛て、强さ弱さを試む、唾を呑込つ一心不亂、既に其夜も更渡り、四方に聲なく物凄き中に烈き弦音を寐耳にふつと主は左内、訝さに起上り、耳を側て聽すます。此方は一間は娘の花江、母の寐息と窺ひつゝ、そつと抜出で忍足、間の扉に身を寄せて、内の樣子を窺ひすまし、はッと‥息與覺め顏、獨頷き立戾る。影をちらりと認むる左内、樣子ならむと控へ居る。夜も半次第に明近く隙間を洩る、旭の光、主の妻は勝手へ立出、足音さへもわら〳〵しく、それと此方の亞爾弗王、見附られじと弓矢は道具取片附、勝手へ出、やとへ〳〵御内儀御早う御目覺。私は昨日の勞にて思はず寢過し遲りし不調法御免なされて下さりませ。兎角御用を仰付らゝ下されたと揉手をすれば何のいなう。まづ此方へは家の勝手も分るまじ。先此パンを燒つしやれ。焦さぬ樣よしてたもれ。私はから食事前、外に仕事が澤山あり。必ず忘れまいぞやと言附別間へ出て行く。跡に大王つく〴〵と如何に零落たればとて貴き此身を輕々しく下郎の所作に日を送り、我國民は扶けを受るも皆彼敵は故なれば、神に誓つて此遺恨、晴さで措ふかと思ひ知れ、齒を嚙しめつ拳を握り、怒れる面色物凄く、威有つて猛き御容貌、實に英吉利を引起す公の御德ぞ芳しけれ。大王ふつと心附、今こそ皆々何へか行れたさうな。ぞりや此間にちやつと夕べの仕殘し、急くまじと立上り、再び取出す弓矢の道具。心を凝し氣を凝し、闘ふぞ時は移るぞ、兼て火鉢に仕掛置パン悉く焦燒て、烟と共に香るに、ここ、斯と嗅付主の妻、足もそゞろに走り寄。夫と見るより大に驚き、遠慮會釋も情けなく君は臀と引摑み、引回しく聲ふるはして怒の顏色。ヤア此方て、ふく〳〵。如何に雇はるゝ慾氣の薄い身ぢゃと言ふてのら、折角言付し此パンを、斯く焦すとは何事ぞ。焦さぬ樣にと與々言しと、此方は何と聞、やゝた。女と侮る憎き奴、思ひ知やと打擲。音に駈來る主の左内。何思けん火鉢の燒鐵、取よと見えしがこは如何に、亞爾弗土の玉顏へひたと押當發らそれば、わつと一聲伏し玉ふ。夫と見るより走寄る花江、こは何故ぞおいと　やゝお心慥にお遊ばせ。

（未完）

東京音樂學校開校式唱歌

去る十二日上野の東京音樂學校において開校式を行はれ、朝野の淑女君子多數其招待に預りました。今其節奏せられた諸曲の中を一二左に載せます。

歌の徳

いはへ祝へ、いざもろともよ。うたへうたへ、やまとの歌を。　大和のうたは、ことだまの、さきはふ國の、ひゞきぞこゑぞ。

けやけきひゞきや、さやけき聲や。よろこぶこゑには、國民したしむ、いかれるひゞきは、鬼とも泣くなり。あやしのいさをや、歌の徳。

あはれ、あはれ、これ歌。あはれ、このやまとうた。

花とめでつゝ、くらす春の日、月にむかひて、ふかす秋の夜、風をうらむと、雲をかこつと、つねよ汝がつめ、なぐさめて。

はしきしらべや、めでたき音や。心通ひたる、友はまの友。　ピアノのをごと、うつたへよ、はしきしらべや。めでたのおとや。

祝へいはへ、いざもろともよ。うたへうたへ、やまとの歌ぞ。　大和のうたは、ことだまの。さきはふ國の、ひゞきぞ、こゑぞ。

をごと、うち、ことほぎ、うたへや。ともおうたへや、やまとうた。うれしのこの日ぞ、たのしのこの日ぞ。をこと、うち、ことほぎ、うたや、うたへ。ともようたへや、やまと歌。うれしこの日ぞ。たのしのこの日ぞ。緒琴、うち、ことほげ。をおとうちおとほげや。

都の春

霞るくまなく、晴りあく、光り輝く、朝日影。うもの川風、のどかなる、都の春は、なりぬれば、野山のくさ木、おしなべて、花咲きけり。白妙の、富士の高根も、みちのくも、つもりし雪の、名残なく、とけて流るゝ河水の、行末廣き、濱半のた。波静けき、四方の海、寄せ来る舟の、打つどひ、惠もふかき、大君の、豐かる世よ、たちかへり、萬代うたふ、聲ぞ絶えせぬ。よろづ代歌ふ、こゑぞたえせぬ。

花兄弟二枝梅香（つゞき）

立花家のそる

本舞臺一面の平舞臺上手一間の床間積いて地袋違ひ棚下の方屏の地紙と散したる張壁上下折り廻し塗骨の障子ド手斜に繪心に廊下奥座敷に見せさる道具凡て武藏樓座敷の体茲に小芳藝者好の拵へ抱へ藝者小蝶花助月太と相手に酒を飲んで居る此模樣宜ろしく騒ぎ唄にて道具止る

芳　さアく御客なしれ氣散じ遊び御前迄も澤山御飲み。

蝶　夫れでも酔つて仕舞つたら父姉様の御小言だらう。

月　私やへ層酔ひましたよ。

花　あア、今日ハ立派に姉さんから澤山飲をなど御許故姉さん叱りはしまいねヱ。
芳　さうとも／＼御客の座敷と違ふから何の遠慮が入るものか／＼ね。平生からして家の為め稼いで呉れる御前達他人交へず内輪の一座いくら酔つても叱るものかね。
花　私達も姉さんの抱とあつた果報者。
月　年が年中御座敷で野暮な御武家か生意氣な鹿沼邊りの商人の
雪　御客に出てハちやはやと鼻毛をよんだ口直し今日が世に言ふ命の洗濯。
皆々　やつくり騒いで遊びましやう。
　ト皆々酒を飲み大部に酔ふたる仕打。
月　それハさうと先ッきから呼にやつた梅吉さんどうしてこんなに晩いのだらう。
花雪　もう來さうなものだねヱ。
　此うち小芳ハ腹の立つ仕打にてぐび／＼酒を飲む。三人ハ替る／＼酌を為ながら不審の思入れ。
三人　姉さん又焼け飲をするの。
芳　餘り癪に障るからさ。
三人　何よがそんなに癪に障るれ。
芳　えヱ御前達も解らないねヱ。
三人　えヱ

芳　今宇都宮で姉様株と人に言はれて大勢の束もえて居る此の私が新參者に梅吉に大事な御客を横取され、腹が立ゝずに居られるものかね。
月　そんなら彌々親分ハ。
花　梅吉さんと御馴染かえ。
芳　馴染どころか二三日内親分様が落籍せるとてこゝれ女中が密々話し。私や彼奴に見替られたよ○
　ト又茶椀で酒を飲うとするを小雪ハ止め、
雪　姉さん夫れでハ毒ですよ。
芳　でも奥座敷に親分と彼奴が一所に居ると思へバ口惜くつて大きな物で飲まないでハ肝癪み蟲が承知しないよ。いゝから構ハず一杯つぎな。
雪　夫れでも身体に障りますもれ。
芳　えゝどれッたい。つがないのかえ。
　トきつと云ふされにて小雪ハ余義なく酌をする。
彼奴が茲に來たならバ大勢よつて散々にいぢめてやらねバ腹が癒へぬ。御前達もその氣になり私の仇をとつて御呉れ。
月　御頼みなくとも日頃から器量の能いれど江戸兒を鼻に掛けたる面悪くさ。
雪　新參者の僻よして生意氣過ぎた彼れ梅吉。
花　よつてたかつて姉さんの顔の立つやう色々に無理難題を言ひ掛け是から一座の出來ぬ程恥面のろしてやりましやう。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ト皆々言合せ宜しくある。

芳 しかし先ッきから余程のひまどり。

三人 とりや三人んで引張つて來ませう○ト立上らうとする下手にて

梅 いや御出には及びませぬ只今それに參ります○これにて三人ハうなづき合ひ控へる介方になり下手より以前の梅吉出で來り程よき所へ住ひ、これハ〳〵姉さん始め皆さん方大きに晩くありました○ト宜しくなる

芳 段々迎ひにあげたのハ今もきますと云つたぎり待てどくらせど來ない故どうしたことゝ三人を見せにやらうと思ふところ能くまア來て御呉れだね。

梅 はい直にまゐらうと存じましたれど親分さんや小分の衆が大層酔つて御ゐで故つひ〳〵晩くありました姉さんどうぞ免して下さんせ。

花 おや春早々御惚育かへ。

雪月 ちと慎しんだか宜どんす。

梅 あれハおまア皆様大部能い御機嫌、からかつちやア否ですよ。

芳 ても白々しイ。

梅 え。

芳 いやさ白けた座敷も梅ちやんが來ればどうやら賑かに一座に花をさかすと云ふもんだうぞゆつくり遊んで下さい。

ト梅吉に盃をさす。小雪ハ酌をする。

梅 姉さん憚さまでおんす○ト小雪に會釋する。

梅 どうせ内輪の者だから遠慮なしにすごして下さい。

ト又盃を梅吉にさした

春早々方々から引切りなしの御座敷とは藝と器量の人并にすぐれて居るとハ云ひながらよつぽど御前ハ幸福者。私のやうな老い込んではもう御座敷もへるばかり之を思ふと年々に歳を取るのハ否だねエ。

梅 又姉さん笑談ばつかりそんなにおだてゝ下さんすな私のやうな不束でも呼んで下さるお客のあるハ皆姉様の御引立私やうれしう存じます。

芳 夫れハ茲方で言ふ處そんな遠慮ハ言ハないで私を始め家の妓が賞めて御前の半分でも御贔負受けて御座敷へ出られるやうに願ひます。

ト思入れにて云ふ。

花 今姉様の言ふ通り梅姉さんハ藝者の氏神私達もあやかるやう御盃でも頂戴しましやう。

月 夫れハ何よりようムんす。

雪 姉さん一ッ下いな。

ト三人ハ梅吉の側による梅吉ハさてハと云ふ思入。

梅 わアもし姉さん方もう其樣なことハ言いしやんすな私や穴へも入りたうムんす。

樣子の知れぬ土地と云ひ万事足らハぬ私故力に賴むハ姉さん方不便な者と思召し必ずともに何事も御差圖なさつて下さんせ。
芳そりや何事も梅らやんハ私れ差圖よ從ふ氣かエ。
梅藝者れ束をなさる姉樣位のハないで何んとしましやう。
芳くも柔さしイ御前の心今更ムふでもないけれど凡て藝者と云ふ者ハ姉樣株の差圖を受け、仲間の義理を欠かぬやう御客大事に御座敷を勤めて行くの稼業の作法必ずともに愼んで出過ぎたことハ爲さんすなとハ言ふものゝ平生から發明すぎた御前に向かひこんな寐言ハ釋伽よ說法御前も聽いちや呉れまいねエ。
梅えエまア難有い其の御言葉何から何までかんでふくめる御心添。私や嬉しう存じます。
芳そんなら私の言ふことも御前ハ嬉しう聽かんすかエ。
梅聽く段でハムんせぬ。私や御禮と申します○ト逆ハぬ仕打。
芳うん其の御禮と言ふ樣でよくも男を寐取つたね。
梅え男と取つたと言ハさやんす。
芳梅らやん餘り白を御切るであいよ○ト合方きつばりあり、
野州切つて顏役の彼の敷島親分を御前ハとうとうたらしこみ私の顏を汚したね。いやさ仲間の義理ゲ夫れでも立つかな弘光をあしたハ此虫と思つて居たに御前ハまア大した腕につたね。

梅これハまア思ひもよらぬ御疑ひ。
芳いやいやもう言譯を爲さんすなつい斯と言つて御仕舞ひ。
梅夫れおやと云ふてみすみす覺のないことを。
月はてさて夫れの惡い量見言譯を爲る丈け姉樣の御腹立
雪早く斯うだと白狀して、
花謝まねことぞも姉さんよ、
三人わやまつたの漉らムんす○トわやわや言ふ。
梅たとひ何程被仰つても身よ覺なき濡衣故どうぞ疑ひ晴して下されもし皆樣御願でムいます。
ト色々頼めど三人ハ顏を背け知らぬ風をする。
あアこりやどうしたら能からうかいなア○ト途方よ暮れたる仕打三人ハせゝら笑ひ、
月男嫌と評判當にならないいたづら猫生れが惡いか食ひ物の惡いか知らねど大それた人の肴に手を掛ける
雪顏に似合ハぬ泥棒猫
花其のどら猫ハ鼻面を一層のことよ。
ト三人立上るを小芳ハとめて、
芳これハしたり御前達ハどうしたもんだ。
三人夫れでも餘り。
芳はて手荒いことでもしたやうに親分さんに言ハれてハ御前達ハよけれども私のどうやら抱妓に差圖でもして大勢で彼の大人しい梅らやんをいぢめたやうに親分に思ハれるのハ

知れたこと。さうなる時ハ私の迷惑もういゝ位にしたのよい○ト思入れにて早ざと云ふ三人ハ控へる。

梅ちやん三人共彼の通り酔つて居るから私に免じ心に掛けて御笑れであれよ。

ト盃を梅吉ゑ差し

さア一つ上げませう。

梅吉ハ始終下と向いて居る。

梅ちやん私の盃ハ否かヱ。

梅いえ〳〵否でハ厶いませんが知つての通りの不調法故どうぞ御免下さいまし。

芳おや〳〵これハ奇妙なこと御前が御酒が嫌ひそれハ今日始めてきゝました。

月私も始めてきゝましたよ。

雪御酒が嫌ひで能く御座敷が勤まりますね。

花夫りや梅ちやんハ他の姉さんと違ひ調子や御酒で御客に出るのぢやありませんもの。

月雪花ちやん夫れぢやどうするの。

花おや姉様方も知らないの。梅ちやんハ三味線よりも枕の方だね。

月雪おやまアあきれたものだねヱ。

皆々ハヽヽヽヽ○ト笑ふ。

芳ある程御前達の言ふ通りあら梅ちやん御前は今日から藝者を止め池上町の小店から夫れ相應の名を付けて女郎勤とするがよい。さうする時ハ藝者と違ひ男狂ひハ勝手次第だかし梅様でもかまはぬやう用心をしないぢやいけないよ。

トよく〳〵數言ふ梅吉ハ無念を堪へること宜しくある小芳ハ能ハ氣味だと言ふ思入れにて盃をぐつと飲みほす

月太ハ酌をしやうとするを止め、

梅ちやんいやされいらん御酌を一つしておくれ。

梅あの私よ。

芳えヱ何ふも驚くにハ及びませぬ私の御酌ハ出來ないかヱ。

梅それでも餘り。

芳えヱおれたい早く御つぎな○トたつと云ふ梅吉ハ始終情ないと云ふ思入にて餘儀なく酌をし堪へ兼てハヽヽヽヽと泣き落す小芳ハせゝら笑ひ、

おやもう泣面をするのかヱ春早々延喜でもないそんな弱い量見でよくまア親分とだましたね。もう御酌も頼まぬかはりあんぞ一つ踊つて御見せ。

三人これハ能い思ひ付き梅ちやん是非とも願ひます。

芳定めて江戸の生れ故流儀ハ西川か藤間かヱ○ト三人に向ひ御前達の踊と違ひ梅ちやんのハ江戸仕込稽古の爲先に見て御いで。

三人サア〳〵踊の所望ぢや〳〵○トわや〳〵言ふ梅吉ハ始終うつむいて居る。

芳そんなことでハ御客ふ出る時困りますこんな者でも藝者衆ハ束と去て居る私故恐い所ハ直して上る。さつさと早く踊りなさんせ。
トきつト云ひ三人ゑ目くばせする三人ハ無理に梅吉を立しせ有合の扇を持たせる梅吉ハ色々口惜しき仕打あつてとゝ立ち上り、
梅恥かしなアら。
ト涙を飲みこみ扇をばらり開くをきつかけに下座の謎の唄になる涙に忍でん今様を雛ふ此中ニ三人ハちよい〱からまふことも有つてをさまる三人ハ感心の思入れ小芳ハあつけに取られ仕打。
三人やんや〱〇さア〱〱今度ハ甚句の所望ぢや〱。
梅姉はもうゆるして下さんせ。
ト言ふを皆々聴かぬ振をして、
三人さア〱甚句の所望ぢや〱。
ト三人ハ無理に梅吉の手を取りまづき廻す。いぢめる事宜しくあつてやゝ小芳ハ側に寄りやるを小芳ハ梅吉の手を取り引倒さうとするを梅吉ハ小芳の腕をねぢ上げたつと仕打、
梅あいた、、、こりや私に手向ひするか。
梅さ手向ハ致しませぬが最前よりして餘りの雜言私や口惜しう〇又ねぢ上げる。

芳あいた、、、
これにて梅吉ハふと心付たる氣を替へ小芳の手を振り放ち、
梅ムんすわいなア〇ト泣き伏す小芳は手のしびれよる仕打三人ハびつくりア仕打あつて、
三人姉様ゑ手向を爲るふんぱり藝者以後の見せしめ覺悟しやがれ。
ト三人ハ擧つて掛るを梅吉ハ以前の扇を以てあしらいきつと見得合方謎ひの端唄にあり三人を合手に一寸立廻りあるとゝ三人ハ協ハぬ思入にて小芳を殘してこそ〱上下ニ逃げて這入る跡小芳ハせイと奥へ行うとするを梅吉ハ堪へ兼て、
梅あアも　姉さんちよつと待つて下さんせ。
これにて小芳ハぎつくり仕打あつて、
芳御前ハ私に用ハ無い筈。
梅いゝや有ります待ちまやんせ未だ新參の私故足らハぬこともも御ムんせうがあせ教へてハ下さんせぬ。
芳や
梅夫れのみならお深座け中で女郎藝者の泥棒のとよつてたかつておくたい雜言よくも御前ハ言ハしやつたなア。
ト口惜しき仕打。
芳れウ言つたがどうした。
梅そりや餘りで御ムんせう。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

芳あまりの餘り。
梅ナ果敢ない三昧よ世を渡れど情ハ賣らぬ私の潔白めつたあことハ言れしやんすな○トきつと思入小芳ハぐつとつまりだまつて奥へ行うとするを引き留め双方入れ替つてそつとなる此時下手より御浪茶屋女房好の拵にて出來り双方の中よ這入り、
浪屠蘇の機嫌か春早々今花形れ二人の姉様どうしよとの間違ひやら互に散らす仇嵐どうぞ此場ハさつぱりと私に任せて下さんせ。
ト御浪ハ梅吉よ何んにも言ふあとのよてませる。
梅夫りや御神さんれ御言葉故私ハ御任せ申します。
芳私とても同じことと
浪そんあら任して下さんすらやれ〳〵夫れで安心しました。
梅もつれかゝりし綵遊れ柳の糸も春風に、
芳解けてもかしき梅の花。
浪其の梅香を櫻に持たせ柳にさかせた此れ場のをさまり。
芳梅御神さんとんだ御心配を掛けました○ト二人ハ宜しくなる
此時下手より以前の御筆出で來り、
筆小芳さん御座敷でムいます。

芳ぜこから。
筆奥の御座敷で御客様が御待ち兼でムいます。
ト御筆ハ下手に這入る。
芳御神さん御免下さいよ。
ト立ちながら、
梅ちやん、
梅はい。
芳そつと御禮ハ致しますよ。
梅なに御禮とハ○ト双方意氣込む御浪ハ宜しくへだてる唄よなり小芳ハ奥へ這入る跡梅吉ハヽヽアと泣き伏す。
浪おゥ尤でムんすよく堪へて下さんした彼の惡くらしい小芳づら姉様株を鼻に掛け我儘氣隨ハ日頃れ常先ッきからの一部始終殘らぬ奥で聽きました夫と堪へた御前の胸さぞ苦しうムんしやう。
ト泪を拭ふ
梅新參者の悲しさハどんな口惜しい無理あことも私ハ堪へて居りまそる。
浪其の柔しい御前よ引き替へ心能らぬ彼の小芳一層のことよ見番よきびしく言つてやりませう○ト腹れ立つ思入れ。

梅あアもし御神さん夫れでハ反つて私の不爲私を不便と思召さバ只何事もおれぎりよどうぞ濟して下さんせ。

浜ても美しイ御前の心私や涙がこぼれます○ト泣く梅吉も愁の仕打先つきよりの樣子と云ひ流石望その、

梅え

浜いやさ望み通りに此場ハこれぎり必ずぐまつて居りませう夫れハさうと此程から江戶の御客でそれハ〳〵八代目そつくりと云ふ水際立つた能い男が度々御前を招ぶけれといつも御前の御座敷故他の藝者を御掛けなさいと御斷を申しるが他の藝者ハ否とばかり今日は是非とも一寸なり逢せて吳れろと私に御頼み幸ひ御前も江戶兒故彼地の樣子や芝居の話互ゝよ話しも勤めの氣晴し先つきのらの氣嫌直し一寸行つて下さんせ。

梅そんなら行つて参りませう○ト形を直し立上る。

浜御座敷ハ中二階の奧でそよ。

梅そいト○會釋して行きかけるを御浜ハ留め、

浜梅ちやん御前惚れちやアいけないよ。

梅ゐれまア否お御神さん○ト恥かしき仕打唄にあり笑ひながら奧に這入る跡御浜ハ感心の思入よて、

浜器量と云ひ心と云ひ流石ハ由ある武士の娘他の藝者とくらべたらわれがほんとの雪と墨それに何にやら一心よ明神樣に願掛けて茶だち揚だちする樣子合点ゆかずと思ひしよ多勢を相手よ先つきの働き。

此時奧よて、

大勢御神さん〳〵。

浜矢つ張り敵の、

大勢御神さん〳〵。

浜えエせわしないト○立上ると道具替りの知らせ、

今行くわいあア。

此摸樣宜しく騷き唄にて道具替る。

日本繪畫の未來（前号のつゞき）大意

外山正一

凡そ世と救ひたる者革命を卒へたる者は國の東西時れ古今を論せず自ら深く信ずる所あつて而して人を信せしめしものなり左れハ今の繪畫を畫がくものゝこゝに注意せすんバあるべからざるあり

畫題れ變遷

凡そ畫題よハ宗敎的天然的歷史的肖像的人事的のものあり而

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

して美術的の繪畫に就いて言へば太古に行はれたる畫題中最も多きものは宗教的のもの次に行はれたるは歷史的大然的肖像的のものなり人事的の畫題の如きは蓋し最初ゟ最も多く行はるゝものなり希臘には隨分早くより歷史的の畫題ありたるよしなれども太古の繪畫ハ多くは鬼神幽界等の畫ありしが漸く世の開くるに從ひて次第に多く歷史的并びに天然的のものを畫がくに至りたるもの、如し又耶蘇教社會に於ては紀元後初時代の繪畫ハ大擧宗教的の者なりしのみならず暗黒時代を經過して繪畫の名ハ漸やく顯はれて繪畫の術始めて復再興するに當てや其畫題ハ大擧皆宗教的の者に過ぎざりしなりこれを本朝畫史に徴するに全くこれと同樣の變遷ありたるが如し是ハ素より明らかなる理由あるとなり夫れ太古に在つて人の最も大切と思ひたるものハ神佛の外ならざるなり希臘に於ては最初より耶蘇教社會及び日本等の如く宗教畫盛んに行はれずして歷史的大然的等の畫の割合に多く行はれたるハ畫人に名人の出でたる時既に宗教思想の盛んならざりしが故ならん左れバ畫題の變遷も必らず時勢の變遷に伴なはずんバあるべからざるなり何れの國何れの時代を論せず世に行はるゝの畫題ハ當時世人の最も注意と當時世人の感情に最も關係を有する所の事物たらずんバあるべからざるなり爰に一例を擧てこれを論せん何故に日本の畫には花鳥山水を畫かけるもの多く希臘の美術品には人物を殊に裸躰人物を表出せるもの多かりしぞ蓋し何故に希臘の美術上に於ては裸躰の人物著るしき部分を占めたりしやといふの問ひに答へんと欲するものは能く注意せずんバあるべからざるの事情あり抑も希臘人ハ古昔の人民には珍らしく自覺心即ち「セルフコンスレオスチス」に富めるものにして則ち人類を以て此上もなき大切のものと認め人躰を以て靈妙崇敬すべき美觀のものとなし良き躰格を見れバ則ちこれを崇拜せざるばかりに感賞せるなりホーメルの詩中ユリスシ以下勇士の躰格を形容せる條の如きは讀者と跡とも共に其心にあらしめんとするものあり而して彼の四年目毎とに執行せる「オリンピツキゲーム」と稱する國家的競爭遊戯の如きハ希臘人の躰格を完全せしむるに最とも有效なりしものにして希臘人をして善良なる躰格を殆んど崇拜せしめんとしたる程の影響ありしものあり此の競爭に於て優秀なる躰格を示したる此の競爭に於て勝利を得んことハ希臘人の最とも名擧としたる所ろあり此の競爭に於て勇士の躰格と見るハ勇士の勝負と見るハ希臘人民の最とも熱心に喜べる所あり是れ希臘の美術家をして多く裸躰の人物を表出せしめたる一大原因なるが如く顧みて吾邦美術品を觀るに彫刻と繪畫とを問はを裸躰の人物を表出したるものハ二王の外にハ稀に見る所なり是ハ本邦にハ希臘の如く人躰を崇敬するの情趣なかりしと希臘の如く優美なる躰格非凡なる力量早業を目擊して感動するの機會あらざりしと本邦にハ優美なる花鳥絶妙なる景色全國到る所に存在して人の心を奪ひたると佛教と人心として凡俗を離れて花鳥山水を樂しましむるの傾向あると儒教は人を風雅に導き仙骨を帶びしめ清風明月の間に遊ばしめんとするの性質あると吾邦の美術品ハ希臘の美術品の如く一般人民のために作りたるものにあらずして此の如き傾向の佛教此如き性質の儒教の教育を受けたる僅少なる王公貴人のために作りたるものなること吾邦掛物の如く室內裝飾を專ら目的とするの畫に在つてハ花鳥山水の如き畫題最も適したるものなると是等諸般の事情ハ本邦の畫人並びに本邦の畫人を使役したる人をして常に最も花鳥山水に注意せしめ常に最も花鳥山水を樂ましめたる所以なりこれ則ち本邦畫人ハ多く之を畫がきたる源因なるが如し以上ハ即ち本邦畫題變遷の一班を窺ひたるものなり

畫題選擇に關する心得

畫題選擇に關して吾人の心付べきとなり第一畫題は當時人の最も注意する所の事物を選ぶべき事第二畫題は苟くも畫人の感情を動かしたるものにあらずんバ取るべからざると則ち是れなり而して今の畫人と見るに此の二則よく全く無頓着なるものゝ如し左れバ其畫がく所は人をして感動せしむると能はざるなり蓋し今日に於て適當なる畫題ハ花鳥山水禽獸人物歷史人事等の數種に屬するものあり蓋し花鳥山水禽獸等は今後と雖とも何は廣く行はるべきの畫題なり歷史的并びに肖像的の畫題ハ從前よりも多く行はれんとするものあり然れども從前最も少なく行はれたる畫題にして今後最も行はるべきは蓋し人事的の畫題なるが如し今後一機軸を出ださんとするの畫人ハ必らず人事的の畫題を撰むべきなり人事の畫に至りてハ未だ名人の畫がける所多からざるなり然れども予輩の人事と稱せるものは浮世繪者流の畫がく如きものゝ謂ひにはあらざるなり又土佐家繪卷物の畫の如きものにもあらざるなり予輩の人事畫と稱するものハ他に一種あるなり

今後の畫人ハ思想を描くべし

畫は形狀を表するものあり活動を表するものあり情緒を表するものあり思想を表するものあり古來吾邦の繪畫たる大擧皆形狀を表せるものあり活動を表せるものあり情緒を表せるものなり思想を表せるものは至つて稀なり吾邦の畫人ハ尚ほ感納的段階即ち「レセプチブステイジ」にあるものなり未だ思想

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

的段階即ち「コンセプチブステイジ」には登らざるものなり然れども今後は勉めて思想的段階に登らずんばなるべからざるなりこれをなすにあらずんば吾邦の繪畫をして新面目を顯はさしむるには出來ざるなり予は所謂る思想畫とは則ち錯雜なる思想を含有したるものゝ謂ひなり今一二の例に依つて具さに思想畫の何物たるを示さん予輩は頃日鎌倉に於て予輩を甚だ感動せしめたる者を見たり僅かに數尺の高さに過ぎざる一個の墓標なり墓標は全く蔦の纏ふ所となりて恰も蔦を以て作りたるものゝ如き觀あるものなり冷たき石も寒からざるの觀あるものなり老朽せる墓石もつねに青々たるかたち存し居るあり苔を以つて掩はれたる臺石は時代のふるきまとを徴せるに足るものあり臺石に沿ふて其周圍にやさしき姿と貌して咲き聯ねたる紫花地丁は妙なる首を振りて心有りげに點頭くぞ哀れくる後ろには大なる常盤木なり茂れる枝葉は墓を衛りて雨露のために犯さしめざるなり後ろは山の側面なり墓を護して動かざるの勢ひあり遠く向ふを望めば松の並木の間より遙に見ゆる水の面なり見ゆるは僅かに一片の水面に過ぎざると雖も是れぞ則ち渺茫として殆んど際限なき太平洋に外ならざるなり數尺の墓は後ろには動かざる山の抑ゆるあり前には毫塵の障碍もならざるなり此は是れ何ん人の墓なるぞ伊豆の片隅より起りて旭將軍を粟津が原に亡ぼし先づ源氏の一統を遂げ平家を西海に沈めて終に海内を統一したる源頼朝の墓なり日光に於ては僅に三百年舊き「ペイン、ポンプ、エンド、グローリー」のみを見るべきなり鎌倉に於ては八百年の昔なる「チイナブ、レンブリンナ」を見るとを得べし家康は日光に於て廣大に眠るなり頼朝は鎌倉に於て質素に眠るなり然れども家康をして日光に於て斯く廣大に眠らしむる者は鎌倉に於て斯く質素に眠る頼朝に外ならざるなり三百年以前に家康として在らしめたるは八百年以前に頼朝のありたるがためなり家康は實に古今無双の英雄なり然れども其三百年以前に成就しつる所は則頼朝の八百年以前に創しめたる所に過ぎざるなり諸君頼朝は墓は畫題として描くべきの價値なきものなるや深遠なる思想を含有するの畫を製出せしむるの資格なきものなるや予輩は畫人にはあらざるなり予輩はこの問ひに答ふるとを能はざるものなり諸君は畫人なり宜く此の問に答へずんばなるべからざるなり秀吉が病床に於て家康に後事を託したるの時は如何なる時なりしや日本の天下は將に豐臣氏の手より徳川氏の手へ遷らんとしつるの時にあらずや天下何人か此際に於ける秀吉を憐まざるものあらんや此際に於ける秀吉の心中は將た如何なりしや失敗は智者の最も恐るゝ所なり而して朝鮮の失策は未だ其局を結ばざるなり子を愛するの情は英雄と雖も同じことなりとは家の永存を願ふは何人も異なる所なし秀頼の暗愚ならんとは秀吉の患ふる所なり家康の正義は秀吉素よりこれを知れり然れども家康は小事のために大事を誤まるものにあらざることも亦秀吉の知れる所なり家康は秀吉の最も恐るゝ所なり然れども天下を託すべきものは特り家康あるのみなり秀頼のためを思はんか豐臣氏の事と思はんか家康に先だつは秀吉の成佛する能はざる所なり天下のためと思はんか萬民のためを思はんか秀吉をして能く成佛せしめ得るものは特り家康あるのみなり秀吉も一大丈夫なり秀頼果して暗愚ならば天下を豐臣氏に返へすに及ばずとも是れ則ち秀吉の赤心なり秀吉も人なり死期に臨んで素より憾む所なくんばあらざるなり然れども亦大いに安んぜる所ありしならん又當時家康の心中は如何なりしや家康は秀吉のために今秀頼と託せらるゝものなり豐臣氏を託せらるゝものなり天下と託せらるゝものなり秀吉にして秀頼のことを豐臣氏のことを家康に託するは素より宜し然れども天下を託するに至つては少しも其必要なきものなり家康の天下を思ふ素より人に託せらるゝことを待たざるなり家康の眼中秀頼も豐臣氏も無し唯特り天下萬民あるのみなり家康は素より秀吉を憐れまずんばあるべからざるなり然れども天下のためには豈悦べる情なしとせざらんや秀頼暗愚ならば豐臣氏に天下を返へさざることは家康の最初より疑はざりし所ならん否天下の嘗て豐臣氏の物なりしことも家康に於て決して知らざる所なり天下は一人の天下にあらず天下の人の天下なりとこそ家康の深く信じて疑はざる所なり秀吉にして家康に天下と託することを語るは「モッケリー」に過ぎざるなり天下は既に己に豐臣氏の有よりも寧ろ徳川氏の有にならずや天己に家康に日本を託せるにあらずや何んぞ秀吉のこれを託するを要せんや予は世間に傳播する所の家康の肖像即ち新撰文部省讀本にも載せたる所の家康の肖像を看て眞に家康の肖像なりとは常に信ずると能はざりしなり然るに昨年東京市三百年祭の時に際して探幽の畫ける家康の肖像を看たり實に家康の肖像と云ふべきもの實に英雄の相貌を表したるものといふべきなり本邦歴史上の事實にして撰んで以て畫題とすべきものも尠からざるなり然れども秀吉病床家康との對面の段の如きものは決して多からざるなり是れ畫人の丹誠を凝すべき畫題にはならざるか此れこそ是れ高尚なる思想を表出せしめ得るの畫題にはあらざるか予輩は畫人にはあらざるなり此の問ひに答ふると能はざるものなり諸君は畫人なり宜しくこれに答へせんとなるべからざるなり

（下略）